



ぶどうづくりを通して とても大事なことを教わる。

二人の兄といっしょに、ピオーネやシャインマスカットなどのぶどうの名品づくりに励む日々だ。植原ひかるさんが畑仕事に携わるようになったのは高校を卒業してすぐだった。

「じつは、二、三か月のアルバイトのつもりでした」

愛車の車検の費用を得ようというのが動機。が、どんどん魅力に引きこまれ、気がつけばアルバイトではなく本業となっていた。作物づくりは何でもそうだが、体力的にきついのは言うまでもない。けれどもそれを上回って余りあるよろこびを自覚したのだ。

一年目の出荷のとき、ハッと気づいたことがあった。収穫したぶどうを進物用のきれいな箱に詰める。「そういう作業は想像していなかったので、とても新鮮でした」。どこかの誰かが、どこかの誰かへの感謝や敬意、あふれる想いを伝えるための、ぶどう。

「ああ、農業の力ってそういうこともあるんだ、と思いました」本を読むのが好きだ。オフの日には、よく図書館に出かける。読みたい本のジャンルは問わないので、端から端まで図書館を歩きまわることになる。それがとても楽しい。

兄妹が力を合わせ、工夫し、問題を解決し、新しい発想をし、ぶどうの質を高めていくために前進する。畑仕事は手がかかればかかるほど、手こたえのある「やりがい」が生まれる。天が、ぶどうを通してその大事なことを教えてくれている気がする。

ぶどう農家
植原ひかる

ゆ
う
ゆ
う、
ゆ
り
は
ま

